

---

# 非現実

天海雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非現実

### 【NNコード】

N4389M

### 【作者名】

天海雨月

### 【あらすじ】

世の中には主人公などいない。 それぞれの視点で話は進んでいく。

## 目次

- 第一回『実験動物編』
- 第二回『暗殺部隊編』
- 第三回『もめごと処理屋編』
- 第四回『都市破壊計画編』
- 第五回『何でも屋編』

- 第六回『地球征服編』  
第七回『異常な事態編』  
第八回『暗殺部隊再来編』  
第九回『未来から着た編』  
第十回『神の一手編』  
第十五回『革命編』  
第十一回『マスター・ハンター編』  
第十二回『マスター・ハンター編』  
第十三回『過去との決別』

## プロローグ（前書き）

映画Wanted見てたら、この能力最高じゃね？と思いまして、小説にしました。

## プロローグ

「ぐは、こいつ何なんだよ」

鉄棒や金属バットを持った暴走族が一人の男になぎ倒された。普通狙われた相手は袋叩きにされてもおかしくなかつた。ところが、たつた一人の男みたいな奴に全員吹つ飛ばされて、倒されていく。

「総長、こいつ人間なんですかね」

「無駄口叩くな。あいつを殺せ、殺せ」

総長の言葉も空しく、暴走族は大半吹つ飛ばされて意識を失つていった。その男みたいな奴は最後に残つた総長に歩みよつた。全く返り血を浴びずに前へと進んで行く。

「お前何だよ。お前人間かよ」

すると総長の前に立つた男みたいな奴はプラカードを出して、返事をした。

「人間だよ（笑）」

総長の叫びも空しく、彼は殴られて意識を失つた。暴走族があれほど齧えて、異常になつたのは、彼らを襲つたのは生身の人間ではなかつた。正確にいうとトラの着ぐるみを来た人だつたからだ。彼は総長が気を失つているのを知らずにもう一度プラカードを出して、総長にメッセージを放つた。

「お前ら今何時だと思ってんだ??（怒り）」

関東最強極悪組が一人の男みたいな奴に全員皆殺しにされた。明らかにその男だとわかつたのは女性にしてはがつちりとした体を持ち、ヤクザたちに汚い言葉を吐いていたのである。

「てめえ、こんなことをしてこの世で生きていけると思つているのか」

「お前らこそ、ここがどこか知つてゐるのか、東京じゃないぞ、九州

だぞ

「組長をお助けしろ、お前ら」

そんな命令も空しく、組長の頭を吹っ飛ばし、殺してしまった。部下たちは悲鳴を挙げた。目の前に死が迫っていることに脅えてしまつたのだ。男は黒いスーツを着て、黒い色のネクタイを締め、黒色の靴を履いていた。一見喪に服しているようだつたが、違つたのは両手に刀を持ち、顔は白い仮面で覆いかぶされていた。顔も分からぬ、そして誰の指図なのかも不明な状態である。

「お前、何の為に俺たちを殺したんだ」

最後に残つたヤクザは仮面の男に話しかけた。しかし、話しかけても無駄だつたようで、彼はすぐさま散つた。男は全員死んだ事を確認しながら、独り言を言った。

「ただの暇つぶしだよ」

日本から遠くに離れた場所でも現実すぎる事が起きていた。最も日常的な場所ではなく、争いが常に発生し、死体なんて当たり前な戦場のことである。

「軍曹、こちらの戦況は絶望的です。応援を要請しましょ」

「貴様、本体と連絡できないのにどうやって回線をつなぐ」

「しかし、このままでは・・・」

適地から爆音が聞こえてきた。さつきまで敵側の歎声が恐怖の声へと変わつていつたのがなんとなく分かる。彼らは彼ら独自の言語でわけのわからないように早口で話しているようだつた。最初は百萬といった兵士の声がだんだんと少なくなつていつたのを感じ取つた。軍曹はちょっと防空壕みたいなものから頭を出した。一人の男が敵国の兵士に銃を向けている。敵国の兵士は嘆願しているかのように何やら言葉言つていたが、その男は聞こえないかのように敵国の兵士に無慈悲にも銃を撃つて殺した。

「貴様、あいつが誰なのか知つてゐるか」

「軍曹、わたしにはわかりません。でも近寄りたくないです。吐き

気がする

一般兵はその男の目を見ただけで吐いてしまったのだ。

「貴様の気持ちが分かる。なんだこれは、この男狂っているのか」  
そして彼らは意識が遠のいた。その男は人を恐怖にさせる目を持ち、  
傭兵ともいえる武器が多く彼の背中にあった。腰には刀かサーベル  
のようなものがあり、今時誰も着ていないような西洋のガンマン風  
の服だった。男はつぶやいた。

「ここも違うのか」

「警部、準備は万全です。髑髏鬼死刑囚は何を齎えてくるのでしょうか」

「あいつが自分から出頭するなんて、世の中どうなつたんだ  
「そういえば、何かに齎えていましたね」

「ああ、そうだな」

警部は髑髏鬼死刑囚をちらりと見た。名前と同じように鼻は削ぎ落  
とされ、目の下は隈だらけ、手は骨と皮がくつついでいるほど痛々  
しいが、この体で被害者たちは騙されてしまつ。絞め技が殺人級な  
のである。そして、撃ち殺そうとも彼の目を見てしまい、恐怖に捕  
われ撃てなくなるのである。そんな、最も恐ろしく、死神よりたち  
が悪いと噂された奴が警部と刑事の前ではおとなしく震えているの  
だ。時折誰に独り言を言う。

「ハ・・・ハ・・・ハ・・・助けてくれ。俺はこんなところで死に  
たくないよ、うぐつ、げ

と何回も独り言を言つ。警部は髑髏鬼死刑囚から一瞬だけ目を逸ら  
した。その時、髑髏鬼の頭から血が吹き出した。そして、声を発す  
る間もなく倒れてしまつたのだ。警部と刑事は自分の目を何度も擦  
つた。彼らがいたのは尋問室、一体どこから撃たれたのかがわから  
ないのだ。窓はあるが、十センチメートルしか開いていない。そん  
なところから弾が飛んできたとでもいうのか。しかも狙撃された場  
所が警視庁である。こんなところ誰も狙わない場所なのに一体誰が、

警察に宣誓布告したとでもいうのか。

「くそ、横水。狙撃犯を見つけ出せ。この警視庁からそう遠くない場所だ」

「はい、警部

他の刑事たちも怒りを表した。自分たちの場所で犯罪など起こらないと信じた場所で殺人事件が発生したのだ。怒り狂つ警視庁から約四キロメートル離れたビル屋上から一人の男が狙撃銃を直していた。その男は黒髪に赤いコート、口からキャスター・マイルドのタバコを吹かしていた。男は空を見上げて言った。

「くだらねえ仕事だな」

## プロローグ（後書き）

へんな所真似てしまつた。

## 『実験騒動編』（前書き）

実験動物編ではなく、実験騒動編でした。誠に申し訳ありません

## 『実験騒動編』

### 第一回『実験騒動編』

俺はいつも通りに頼まれた荷物を宅配していた。宅配便で送ることは簡単だが、送らないといけない側は結構大変である。まず、事前に全てのルートを覚えないといけない。どこが工事中でどこが封鎖されているのかも知らないといけない。運転免許書はもちろんだが、安全運転を心がけないと世間に文句を言われる。宅配会社は学校のようなものである。学校がPTAを恐れるのと同じで宅配会社も顛覆されている会社には文句が言えない。俺もその犠牲になつたわけである。会社から突然電話が入ってきて、N・C会社にこの荷物を宅配しろと言われた。N・C会社は基本的にゲームなどを制作する会社で有名だ。

この会社に近づくにつれて体が凍り付く感じがした。自分で言うのも何だが、ゲームが作られているのは一階で後は何に使っているのかわからぬ、そんなところに行くなんて正気の沙汰じゃない。

第一、休日なのに何故こうも人が多いのかがわからないからだ。普通休日は警備員ぐらいが警備しているだけだと思っていたが、ここは休日がないのかと思うぐらい騒がしかつた。荷物を持ってきたがその荷物はとても軽かつた。段ボール箱なのだが、何が入っているのかも記されていない、ただ俺に頼んだ会社の人がひどく齧えた感じがした。そんなにここの人は怖いのかと思った。俺はここに二、三回しか行ったことがない。一回目は挨拶の時、二回目はある小さなプラスチックの容器を届けに行つたとき、そして三回目は小さな段ボールを届けに行つた時だけだ。先輩たちの間では四回目にこの会社に配達に行く事は不吉で過去に四回以降行つた人がいないらしい。俺としてはそんな噂を信じていなかつたが、いざ日の前に来ると足が震えて前に進めなかつた。俺は自分を落ち着けさせなが

ら受付へと足を勧めた。自分自身にいつも通りに受付のお姉さんに  
判子を貰つて終わりだと、言い聞かせた。

「あの、シロクマ藤山の宅急便ですが、お荷物届けに参りました」「あ、はい」

「そうだ、これで終わりだ。そう思つた矢先にいつもと違つた口調  
でお姉さんは俺に言った。

「これは科学部用ですね。科学部は十三階にあります。そこで判子  
を貰つて下さい。あと、くれぐれも違う階には足を踏み入れないで  
下さいね」

お姉さんが何か違う人だと思えるぐらい変わつていった。前に会つ  
た人とは中身が違うように素つ氣無かつた。彼女から発する笑顔は  
俺に対しての敵意とでも表したい。俺は彼女がまるで人の皮を被つ  
た化け物のように思えた。俺はたいてい人がどんな感情を持つて接  
しているかは分かるが、彼女はそういう感情が見受けれない。や  
ばい、何考えてんだ俺は。俺はエレベーターに乗り、十三階のボタ  
ンを押した。十三階といえば結構上のはずだが、すぐに着いた。そ  
こは真っ白な場所で部屋にいくつもの番号が書いてあつた。一つだ  
け科学部としか書いてなかつた部屋があつた。科学部の部屋だけ血  
のついたような感じの跡が残つていた。俺はこの部屋から異様な雰  
囲気が出てくるのを感じ取つた。俺にもシックスセンスがあつたの  
か。いや、ここで判子を貰えば、さつさと帰れる。そういう聞かせ  
ながら、部屋に入り込んだ。

そして、目の前にはへんな生き物が十匹ほどいた。そいつらは口  
を赤くして何かを食べているようだつた。猿といえばいいのかわか  
らないが、俺に狂つたように吠えだしたのだ。しかも襲いかかろう  
とした。俺は、そのとき咄嗟に部屋から出て、扉を閉めた。そして、  
扉の前で考え始めた。夢だと信じたかった。ドアを押さえつけたが、  
猿いや狂つた猿たちはドシ、ドシとドアに体当たりしてくる。何度も

も何度もドアを潰すかのよう。俺はその時、どうすればいいかわからなかつた。でも咄嗟に隣の部屋が少しだけ空いていることに気がついた。そして、俺は隣の部屋のドアを開け、扉の外に息を潜めた。すると狂つた猿たちは何の疑いもなく、隣の部屋に飛び込んだではないか。そして俺は慌てて扉を閉めた。どうやらこじだけは自動ロックで閉められるようだつた。俺は安堵ともに自分が届けるはずの箱が異様に軽い事に気付いた。俺はこんな死にかける体験をしたのだからこの箱の中身を開けさせる権利があると思ったのだ。そして、そこにあつたのは長い文章が書いてある紙切れだつた。こんなもののために

俺は命を狙われたのか。そんなことを思いながら、恐る恐る一つ折りしている手紙を読んだ。

『拝啓、この品物を運んでいる青年へ。

君は非常に運が良く、悪い方でもある。運が良いというのは我が社の第一回人間改造計画に参加できたというものである。

悪いというのは君は自らの手で私が用意した刺客と戦わなければならないということだ。

もちろん君の幸運を祈るが、私たち会社としては君が負けてくれたほうがいいんだけどね。

私が用意したのは十四の狂つた猿、そう「きよしえん」とでも名付けようか、その猿たちを撃退することだ。

甘さんて捨てる事だね。彼らは人間を食うことを好む動物だということを。

これだけだと思うのは君の勝手、さあゲームの始まりだ。

P・S・

君が死んでも誰も悲しまない。そういう事は調査済みだ。君はここに足を踏み入れた時から運命は決まつていた。あと、殺せなかつたら、どこまでも追いかけてくるから、忘れずに』

俺はこんなものを大事そつに持つていたのか。そう考えながら、その場に座り込んだ。

赤いコートを着た男は向かいに一人の男が立つていてことに気付いた。その男は手に鉄パイプのような物を持ち、椅子に座っていた男を殺しているようだつた。男は髪の毛が青く、長髪でしかもガムをクチャクチャと噛んでいた。赤いコートを着た男は青い男に言った。

「また、撲殺か。好きだなそういうプレイ。それよりもまたガムか。いいかげん諦めろ、ガム噛んだくらいでタバコは辞められねえぞ」「やらない奴に説教されても説得力はねえよ」

「何だと、この青二才が」

「あん、今更先輩面かよ」

二人が取つ組み合いになりかけた時、今まで見ていたかのように陰から声がした。

「やめる、二人とも。それよりも新しい仕事が入りそうだ」

「ちつ」

二人は途端に取つ組み合いをやめた。そして、この男に逆らえないような雰囲気である。陰からだが、その男から来る威圧感は常人ではなかつた。

「おい、お前ら。さつさと今の奴をどつかに埋めて、本社に戻るぞ。どうやら新しい実験体が来たようだ」

「またか」

三人はその場を後にした。血まみれの男は新聞でも有名な殺人鬼と似た顔をしていた。

俺が座り込んでいたら、さっきの猿たちが今度は閉まっているドアを怖そうとしていた。恐怖に捕われた俺は、思わず叫んでしまった。理不尽な出来事があると人は誰だって叫びたくなる、それが人間という生物だからだ。俺は空いている部屋が科学部だけだと分かった。あまり信用できなかつたが、一応電気を付けて中を見渡した。中は科学部に相応しいほどの物がたくさんあつた。ところどころ壊されているのはさっき猿たちを入れたせいだろう。そう思いながら、そこに転がっている鉄パイプ拾つた。その時、俺に向かってくる動物いた。さっき全部の猿たちがいたわけではないということを見落とした。猿だけで考えが甘かつたのだ。こいつら猿は俺たち人間より遙かに頭がいい、つまりここに忍び込んでいても可笑しくはなかつた。この猿は俺がここに入るとわかつていたかのように俺に飛びかかってきた。俺は腕を噛まれ、必死にそいつの頭を鉄パイプで殴り続けた。猿の歯は俺の腕に刺さり込み、血が洪水のように流れ落ち、腕が引き千切られるかと思った。ようやく殴り終えて、猿が死んだのがわかつたが、猿の頭から脳のようなものが出てきたときにはさすがに吐いた。罪悪感だと思つていたが少々違う。どちらかというと今まで蓄積された恐怖だろう。これほど吐いたのは久しぶりだ。あと、九匹殺さないといけないのは少々嫌な感じだ。腕は一本しかない、ならば鉄パイプを一本持てば勝てるかどうかは疑問だ。

科学部ということを忘れていた。俺は、さっきまで猿たちが食っていたものを見て、また吐き氣がした。人の腕だからだ。そして、その近くに何か紙が落ちていた。その紙を見て、俺は驚いた。さっき貰つた紙と同じではないか。違うとすれば第一百九十九回ということだけだ。つまり、この会社は人体実験を何事もないように実験しているとでもいうのか。いや、考えるのは止そう。今起こつていることに集中しなければならない。俺の力では一体仕留めるだけ精一杯だ。ならば、まとめて始末するにはどうすればいいか、考える。俺は長い時間考えた、その時間が一時間だと思えたが、携帯の時計

を見ると五分ほどだつた。ちょうど水があった、さつき猿たちが暴れたのだろう。そこから大量の水が溢れ出た。この蛇口をいとも簡単に壊せるのだから、相当な腕力だろう。水と電気、そうか感電死させればいいのか。

だが、電気はどこから調達するさすがに蛍光灯から電気なんて来ないだろう。そうしている間に隣の部屋のドアが破られるのに気付いた。このままでは食われてしまう。ならばと思い、俺はドアと俺との間に水を打つ掛けた、ドアは開け放しに猿たちを待ち構えた、鉄パイプ一本持つて。猿たちは躊躇無く入ってきた。一、二・・・・九よし、全員いるな。俺は蛍光灯を壊し、そこから来る電気で感電死させようと思った。ところが、奴ら勝手に自爆した。どうしてかわからなかつた。猿たちが叫びだし、演技のようにも見えたが、目から血を出し、お互いを殴り合い、そして最後の一匹になるまで死に絶えてしまつたのだ。これほどあつけないものはない。そして、さつき電気を送つた水は当然俺にも届いたので半端ないほどの電気が俺を襲つた。黒こげにはならなかつたが、脳や心臓が揺れて、目が可笑しくなつた。感電したところでようやく何が起こつたのかわかつた。猿たちは摩擦電気に襲われたのである。それに驚き、ノミのよう振り払おうとした結果お互いが密集していたのも原因ではあるが、殴り合いに自分たちで自分たちを殺す結果となつたのだろう。俺はそこらへんにあつた布で傷口から血を止めた。意外にもあつけなかつたと思った。だが、これで会社側は落胆するだろうこの俺が生き残つたことに。口から笑みが止まらない、とつせに大きな声を出してしまつた。

「ふははは、ざまーみろ。お前らの計画は破綻だ」

命を得た時ほど嬉しい物はない。そう思い、笑つていたが、床に水でぐしょぐしょになつた紙の文字が気にかかつた。《これだけだと思うのは君の勝手》という文字だ。まさかまだいるのか、そう思つていたら目の前の扉から低いうなり声が響いた。この声はさつき

とは違う。そう大きな猿か、まさか狂ったゴリラともいうのか。そう考えた俺は間違つていなかつたことに後悔した。何故ならドアがいきなり吹つ飛んで木つ端みじんになつていて、目の前にゴリラに似ても似つかないほどの存在がいたからだ。

「まだ、奴は見つからないのか」

「新庄警部、落ち着いてください。今他の刑事に連絡しています」

「くそ、一件もだぞ。髑髏鬼と鬼神が殺され、しかも警視庁の中です。こんなこと考えているのは変人かテロリストぐらいだろ」「

「新庄警部、さきほど髑髏鬼から発見された薬莢が分かりました」「何口径だ。M21のものか、それともVSSか、あるいはM16か」

「いえ、どれのものかさっぱりわかりません。特徴といったものが無いのです」

「そんな馬鹿な。普通、薬莢で全てとは言いきれんが、銃の種類ぐらいわかるだろ」「

「いや、銀色の弾丸だということだけしかわかりませんでした」

「皮肉なこつたな。悪靈を倒すために銀色の弾丸を使つたように見せかけたとでもいうのか。くつ、それよりもあの暗号は解けたか」

「はい、鬼神が書いたと思われる血の遺言はどうやら彼が書いたものではないということが判明しました」

「奴のものではない。じゃあ、誰が書いたんだ」

「それが犯人によるものだと思います」

「ふん、俺たちに挑戦状というわけか。それで、なんて書いてあつたんだ」

「いえ、その、この内容をいつのには少々抵抗があるのでですが」

「別に俺は怒らんよ」

「はい、では読みます。無能な警察は要らない。さつさと自分たちが作った檻の中で震えている。お前たちでは悪を裁けない、代わり

に俺たちが裁いてやる。世界が滅亡するまで泣き続ける」

新庄警部は机にあつた灰皿を床に叩き付けた。そして、拳を何度も机に打ち続けた。

「こいつは本当に狂つた頭をもつてている人間だな。だからわざわざ警視庁内の檻に鬼神を置いたのにも納得できる」

「しかし、警部。このまま黙っているわけにはいきませんでしょ」「確かに。ところで上は何て言つてんだ。まさか手を引けと言つてゐるのか」

「実は・・・」

「そうか、警察はいつから腑抜けになつたのかな」

「さあ、戦後からではないでしょうか」

「悪いが、こんな挑戦状を叩き付けられて家で寝るよりは事件の解決に挑んだほうがまだましだ。一緒に来るか佐野」

「お供します」

「このゴリラは一体何だ。こいつは初めて見る動物だ。こんな動物がまだ世の中にいたとでもいうのか、自分でも信じられない。体や足は確かにゴリラだが、腕はオラウータンのものだし、顔なんて猛々しい顔してて、俺に向けてくるのは悪意でしかないと思う。こんな化け物と俺は戦わなくてはいけないのか。というか、脱出の道は断たれた。こんな一メートルもある馬鹿でかいゴリラが目の前にいて避けて逃げるなんて四十ヤード四秒のアメフト選手でも無理だろう。ゴリラの口からガリッという音ともに何か吐き出した。俺ぐらの大きさの頭蓋骨である。人間であることは確かに猿の物とは少々違う。こいつの目は俺から逸れない。たしか、ゴリラは目を合わせると襲いかかってくるはずだ。俺は必死に目を背けようとしたが、ゴリラは俺のところへと向かってきた。まるで目を合わせるといふような目だった。俺は怖かったので目を合わせないように努力したが、つい目を見てしまつた。その途端、俺は宙に舞つてしまつ

た。オラウータンの腕が俺の腹をぶん殴つたのである。肋が六本ぐら<sup>イ</sup>い折れる音が聞こえた。

これほど強いといふのかと思いながら、一度目の嘔吐を床にぶちまけた。今度は血だつたが。ゴリラは第一の攻撃を仕掛けてきた。こいつは野生動物いや、狂つたゴリラだ。どんなことがあろうとも死ぬことは許されない。こんな理不尽なことをされて死んだら、なんかあの科学者に腹が立つ。俺は必死に物を投げた手当たり次第。椅子、ゴミ箱、第、どれも致命傷にはならないものばかりだ。鉄パイプを投げた瞬間、いけないと思つた。鉄パイプは人間でも武器になるもの、こんなゴリラが持てば鬼に金棒だ。案の定ゴリラは鉄パイプを自分の武器とした。振り下ろされて、また怪我をすると思ひきや、ゴリラの動きが一瞬止まつてしまつた。摩擦電氣だ。俺はこの瞬間を見逃さなかつた。そこらへんにあるものをゴリラの口に入れこんだ。もちろん口目掛けて投げ込んだ。どれとして入つたものはなかつたが、たつたひとつだけ手榴弾にたへんな小型爆弾を投げて入つたのは見た。だが、こんな小さな爆弾では何にもならないだろう。ゴリラは二、三秒止まつてからまた動かし始めた。そのとき、ゴリラの腹の中でバンという音が鳴つた。たつたそれだけかと思ひ、生きることを諦めた瞬間、腹から爆音といえるものが鳴り響き、俺はゴリラの腹から出た臓物などが顔にかかつた。一体何が起つたんだ。爆発物にはてんで知識がないからわからないが、あんな小さい手榴弾でゴリラを倒せたとでもいうのか、さつき投げた弾みでよく見なかつた説明書があつたのに気付いた。「小型プラスティック手榴弾」と書いてあつた。

さすが科学部いらないものにいるものに作り直してくれるものだな。そして同時に発煙筒のようなものを発見した。そして隣には何故かマッチがあつた。これで何をしろというのだ。臓物を払いのけて、三度目の嘔吐で床をぶちまけ、この会社から一刻も早く逃げたがつたが、正面には銃のようなものを構えた人がいた。そして、同時に俺に向かつて言った。

「よくもやつてくれたわね」

「Hold up! You son of a bitch!」

「？」

「I say hold up. You don't understand English? Or perhaps you are a mad guy?」

「？」

「Sir, this guy can't understand English. Can I kill him?」  
「Wait. Maybe he can speak English but he just act like he can't speak English」

「何を言っているのかさっぱりわからん。俺の道を邪魔する奴は排除するだけだ」

「What's a . . .」

二人の兵隊たちは無惨にも首が吹っ飛ばされた。その後ろに幼い女の子が体を震えながら、その男に問いただす。

「日・・・本・・・人?」

「そうだ」

さつきとは違い怒った様子もないほど顔から笑みを浮かべた。顔中に傷がなければ良い男であり、イケメンであろうが、傷だらけの顔は殺氣を放つているものに近かつた。女の子は脅えてしまった。体には無数の拷問跡があり、顔中至るところにあることが肉眼でもはつきりと見えた。

「お前も日本人か」

「う・・・ん、でもこ・・・の人た・・・私を」

「言わなくていいよ、別に。俺も昔は日本人だつたから  
「む・・か・・し?」

「ああ、思い出したくもない日々だよ。人に受け身だつた自分が腹

立つ、まあ、あの後人間改造計画に参加してこの体を得たわけだから、別にどうとは思わないけどな」

「人間・・改造・・計画?」

「はは、なんでもないさ。それよりもお前はこのままここにいるのか、それとも俺についてくるか」

「あたしは・・わからない。このまま、死にたいかも」

「俺はどうするわけでもない。お前が決めた道をただ歩いて行けばいい。死を選ぶならその道を歩いて行け」

「おじ・・さんがいく・・ら殺し・・ても結局は・・一緒だ・・よ」「かもな。もしかしたら、俺は死にたいからこんなところにいるのかもな。安らかに死にな。俺は殺さない、自分で死にたいと思う奴は殺さない主義だからな」

そう言いながら彼は一人で道をただまっすぐ歩いていった。その背中から寂しさという感情は伝わってこない、ただ憎しみという感情しか伝わってこなかつた。

「よくもやつてくれたわね」

目の前で女が俺に銃を向けている。何をやつたのかはわからんが、このゴリラだろう。

「あたしの研究成果をふいにして、あんたそれでも実験体か

「逆切れ?」

「はー?どうしてくれんのよ、ショウジョウが殺されたなんて父になんて言えばいいのよ」

「ふ、ふざけんな。俺は猿たちを倒して安心していたのに、このゴリラがいきなり襲つてきたんだ」

「ゴリラじゃない、ショウジョウよ。狂つた大ショウジョウよ」

「だいたい自分の口から狂つたなんて言つならあんたをなおせり信用できないね」

「信用してなんて言つた覚えないわよ。いい、ショウジョウはね、世界初のゴリラとオラウーランのハーフなのよ。あたしの実験がこ

「人を襲わなかつたら世界初だよ  
それでパーよ」

「襲うわ。さつき研究室から出でてきたのは、研究員が殺されてしまつたからよ」

「何気にとんでもないこと言つたな。つまり、誰でも襲うといつことになるぞ」

「あら、大丈夫よ。あたしにはこいつらがいるもの」

さつきまで部屋に俺とこいつだけしかいなかつたのに二人の人間がいた。二人とも黒髪で背が高かつたが、一人は赤いコート、もう一人は青いコートを着ていた。赤いコートの奴はタバコをスパスパと吸つてはいる、知らない銘柄だ。もう一人はガムをクチャクチャと噛んでいる。赤いコートといつても氣味が悪いほど赤かつた、血の色と同じような色だ。青いコートは雲一つない晴天の空の色と同じだつた。二人共二十歳後半のよう若かつたが、赤いコートの男の顔には傷のようなものが見える、誰かに引っ搔かれた傷みたいだつた。

「おい、こいつが新人か。こんな奴が本当にボスが期待していはつていうのかよ。シルバーが聞いたら嘆くぞ」

「ブルー、あまり変なことを言つな。お前だつて最初シルバーに散々駄目だしされていただろう」

「あ、レッド？お前には言われたくないよ、やさ顔でしかも女たらし、最低最悪の人間だつてブラックが言つていたじやねえか」

「てめえ、やんのかコラ」

「積年の恨み今ここで晴らしてやるわ」

二人とも睨み合いを始めた。この隙を突いて、逃げ出すことはできないだろうか。俺は少しづつ後ずさりした。

「おい、おまえは逃げれないぜ」

二人とも睨み合つていて、俺のことなんて見えないとつたが、手に目でもあるとでもいうのか。

「はいはい、一人とも喧嘩それぐらいにして、こいつを捕まえて、

父の研究を完成するかもしれないから

「ういーす」

二人ともやる気のない返事だったが、目は真剣だった。俺を獲物に例えるなら、チーターに狙いが定められたシマウマの隣で写真を撮っているカメラマンの後ろで齎えているシマウマである。二人は俺の方へとゆっくりと近づいていった。そろり、そろりと。万事休すか。ふと、手に握りしめていたものに気付いた。発煙筒のようなものだ。マッチもある。神が俺に逃げ道を与えたかのような幸福感だ。まさかこの発煙筒、ダイナマイトじゃないよな。ちょっと赤いけど。ダイナマイト？ 発煙筒？ ・・・ そうか、そう言えばいいんだ。俺はとっさにマッチで火をつけ、発煙筒に火を移した。

「ふははは、てめえらに捕まえられて改造されるなら、ここでお前らと一緒に死んだほうがまだましだ。ダイナマイトでの世に送つてやるよ」

「ダイナマイトだとよ。そんなんでの世に行けたらこれまで苦労しねえよ」

「え？」

「こいつら驚かないのかよ。ダイナマイトだぞ一応、結構殺傷能力あるほうだと思うのだが。

「おい、坊主いいこと教えてやる。殺傷能力が一番高いのは確かに爆弾だ。だが、その爆弾よりもさらに高いのは銃だ。そして、銃と爆弾に間に位置するのが刀だ。撲殺、銃殺、爆殺、自殺、他殺など色々ある。だがな、俺たちはこの業界で何年も生きている、今更ダイナマイトなんて驚かないのさ。だいたい、ダイナマイトで人を殺せるわけないだろ。人は動くことが出来るのを忘れたか、そんなもん投げて立つたまま呆然とその爆発を喰らうわけがないだろ」

「こいつ、今銃とか爆弾とか関係ない自殺と他殺とか言つてたけど、一理あるな。でも逃げないとヤバい。こいつらは俺が考えているような奴らじゃない。殺し屋と思っていたが、一種の芸術家だな。などと俺は考えながら、発煙筒を床に放した。発煙筒から煙がモクモ

クと出てくる。俺が逃げるのは一択しかない。一つは強行突破だが、入り口には三人、そして入り口から逃げ出せてもその後が厄介だ。逃げれる自信がない。もう一つは十三階の窓から逃げるという手もある。しかし、その場合死ぬかよくて骨折だ。どうする？俺は慌てながらゆつくりと考えた。この発煙筒はせいぜい三十秒が限界だ。視界を遮つても俺は大丈夫なのか。俺は窓ガラスを叩き割つた。ピーン！ そうだこの手があった。

「野郎、窓から逃げる気だ」

「何言つてんのよ。ここ十三階よ」

俺は煙を下から眺めながら落ちて行つた。人生というものは何か突拍子も無いことが続くこそに利点があつて、何も起きない人生など吐き気がしてならない。あの殺し屋どもに会えたのも運命だつたに違いない。その運命から逃げることは少々悲しいな。そう俺は思ひながら、俺の背中は何かにぶつかつた。

「お聞きください、私は今北九州と下関の間にある関門橋にいます。この関門橋は現在封鎖されています。何故なら、あ、見えました。あの少年が原因で閉められました」

その少年は頭に日の丸の旗を纏い、マイクを持つて、後ろに何十人という人々を従え、マスコミに物申していた。

「俺は明智光秀みたいな裏切り者かもしれない。俺は現代の信長にたてついた逆賊だ。そう言って貰つてもかまわない。だけど、俺はあえてこの立場で話したい。今政府が議論している外国參政権について意義を唱える。たしかに長年住んでいた在日韓国人や中国人は日本に帰化しているかもしだれない。だけどそれと政治と何が関係あるんだ。人は国のために働くのではない、国が人のために働くんだ。政府が人によつて選ばれたのなら自信を持つて政策に取り組めばいいじゃないか。何故そこまで反日にこだわる。どうして外国の反応を見ようとする。俺たちは外国の空氣を読まないと成り立たない存在なのか。違うだろ。俺たちは俺たちの力で日本という国を作り、

俺たち、日本人が日本を作るのが当たり前だ。もし、外国政参政権に文句があるなら、韓国や中国で俺たちに投票権利をくれ、そして韓国や中国に住む日本人に立候補する術を与えて欲しい。それならば俺は認める」

後ろで歓声が響き渡つた。マスコミの女の人は騒然として立ち尽くしていた。

「何が表現の自由だ。結局は政府に管理されてるじゃないか。俺たち国民にも我慢の限界がある。我慢の限界を超えると憎しみと怒りの感情に支配されてしまう。捕鯨問題で海犬の攻撃は我々日本人を舐め腐つている。奴らはテロリストだ、なら攻撃してもどうというわけでもあるまい。何故俺たちは待たないといけないのか、聞きたい。何故こう俺たちは世界の目を気しながら生きていかないといけないのか。戦争が終わつた日本じやない、あれからどれぐらい時間が経つたか。どれほどの人間が堕落し、世界での地位が下に下がつたか。だからいまさら投降なんて糞喰らえだ。俺は日本人だ、俺がどう生きようが世界は関係ない、社会も関係ない、自分の好きなように生きる。フランス革命もそうだ、巨大な王族に革命を起こした市民たち、今こそ立ち上がるべきだ。俺を赤猫と言つてくれても構わない、あるいは革命組織新撰組の一昧と考えてくれても別に気にしない。でもこれだけは言わせてくれ。俺は別に日本を転覆しようとは思つてない。俺たち、日本人の誇りを取り戻す為に行動しているだけだ」

報道陣は全員黙つていた。その後ろで野次馬たちが黙つてみていった。その内三人の男がいた。その三人の男は普通の格好をしていなかつた。普通の格好とは現代人の格好ではないということだ。彼らが着ていたのは浴衣だつた。夏でも無かつたのに浴衣を着て、懐はちょっとだけ膨らんでいた。一人は童顔で金髪で目は青色だつた。外国人らしき顔だつたが、小柄だつた。二人目はゴリラのような顔でゴリラのような体でゴリラのような体臭がしていた。ゴリラ的な

体臭とはちょっと加齢臭だけどそれよりも汗臭いといった臭さである。そして三人目は黒髪でキザっぽくタバコを吸っていた。もし力メラが撮っていたのなら気付いていただろう彼らの正体を。彼らは指名手配中の革命家組織、新撰組の一員だつたからだ。しかし、野次馬たちは気付かないでいる。何故なら何かに集中してしまうと例え隣りに暗殺者がいても気付けなくなっているのだ。しかし、その内何人かの新聞記者は彼らに気付いていた。彼らは三人組を指差してヒソヒソと声を潜めて互いに囁き合った。

「おい、久保。あそこにいる奴ら見ろよ」

「ああ、俺もびっくりしている真田。あの少年に感謝するべきだな、こんなところであいつらに会えるなんて。悪いがこのニュースは内が明日の朝刊で書く」

「ふん、そろはさせるかタコの助。俺たちだつて書くぞ。もし記事になつたらの話だがな」

「だな。俺も思う。どうせ編集長は国民を刺激するなどか言つて書かせてくれないけどな」

「まあな。だがあいつらがここにいるところはあの少年は革命組織新撰組に入るというのか」

「弱そだから入らないだろ。おい、やばい気付かれた。あいつらが消えた」

「さつき写真撮つていてラッキーだつた」

「俺もだ」

三人の革命組織の一員はその場を後にした。見物と行動を起こすのとは大きく違う。見物はいわゆる偵察の一部で攻撃をするために足を動かせたのだ。童顔の顔の男はゴリラとイケメンに話しかけた。

「山南さん、どう思いますか。あの少年、仲間に引き込みますか？」

「まだ、だと思うけどね藤堂君。谷さんだつて彼を引き込むのにはまだ早いって。ね、谷さん」

「ウホ」

「ほら、そりだつて」

「しかし、近藤さんと土方さんには何と言えばいいんだ」「ウホー？」

「え、だから俺たちが新聞に載つてしまつたことを」「藤堂君、気にしすぎだ。私たちが載る訳がない、彼らは私たちがまだ存在していることを危惧している。私たちが生きていることが國民にバレれば、彼らの時代は終わつてしまつからね」「ウホー！」

「だからそんなに気にしすぎなくていいよ。谷さん」藤堂は黙つたまま、扉を開いた。どこかの建物でもなく壁に模してある扉を開いた。そして、山南をちらりと見た。

（どうして、谷さんの言葉がわかるのだろう。ただ、ウホとしか言つてないのに）

「まさか、飛び降り自殺とはね。想像していなかつたわ」「朱雀がいけないんだ。あいつを強制的に連れてかせようとするからだ。お前はいいけど、俺とレッドは後でブラックに叱られんだから」

「死体をイエローに頼んで処理してもらつか。結局実験は失敗だな。次は誰にするんだ」「そうね。この男でもいいんじゃない」

「着ぐるみ着てる男か。なんだこれ本当にこんなやつ社長が望んでいる実験体か?」とこりでどうしたレッド、腹を下したような顔して「おい、おかしくないか。俺たちはあいつが飛び降りたのを見ていないうに死んだと考えるのはおかしくないか」

「お前は頭がおかしいのか、あいつはダイナマイトの威力に吹っ飛ばされて窓に辺り、十三階から落ちて死んだ。それが何の問題があるんだ」

「そこがおかしいんだよ。お前はダイナマイト使つたことがあるか」「俺は撲殺専門だぜ?そんな野蛮な道具使つたこともねえよ」「

「ダイナマイトはあんなに煙がでねえ。つまり、あれほど煙がでたのは俺たちを搅乱させるために使つた、発煙筒だ。この発煙筒は俺たちを騙すために使つたと考えられないか」

「レッド、そんなに真剣に考えんなよ。ほら、イエローが来た。イエローどうだつた」

壁から腕が出てきて、足が出てきた、そして最後に顔がってきた。西洋風の帽子を被り、全身黒ずくめで帽子を深く被り顔がはつきりと見えなかつた。少々薄氣味悪い声でブルーに言つた。

「おい、ブルー坊や。そんな死体どこにもないよ。あんたたち、たぶん一杯食わされたんだよ」

「うそだろ。ここに死体なんてねえよ。イエロー、ちゃんと探したのかよ」

「ブルー坊や、一体誰に物を言つてるんだい。わたしや、イエローじゃぞ」

「そこいらへんにじとけ、ブルー。お前がどう転んでもイエローに勝てねえよ。ブルー俺たちはイエローの言つ通りに一杯食わされたんだ」

「でもよ、俺たちは入り口を塞いでいた。あいつにとつてはそこが唯一の逃げ道なんだぜ、そこ以外から逃げれる道がないのに、どういう意味だ」

「確かに俺たちから逃げるには入り口か窓からしか逃げる道はない。だが、朱雀この他にも出口があるか」

「そうね、ゴミ箱があるわ」

「あんなゴミ箱にどう隠れる? 小さすぎるだろ」

「私たち科学部の連中は大量のゴミ及び死体を投げ捨てる場所をゴミ箱というの。ほら、そこの壁に穴があるでしょう。そこからゴミを投げて一階に送るのよ」

「くそ、それじゃあいつはこれを使つたといつのか。最初から逃げ道があつたんだ」

「いや、それはないだろ? 咄嗟に考えだしたものだらう。窮鼠猫

を噛むともこいつだらう、弱いものが強いものに勝つとこいつことわざ  
があるだらう。それと同じであいは俺たちから逃げるために考え  
を張り巡らし、行動を起こしたとこいつわざを

「レッド。せどり。ちよつとことわざが違うのじやないか、絶体絶命の危  
機に察し、逃げた。彼は逃げるが勝ちとこいつことわざを使って、私  
たちに勝つただけではないか」

レッドは顔を赤くした。

『実験騒動編』（後書き）

めつひや見にくいかもしませんが、すいません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4389m/>

---

非現実

2010年10月10日20時11分発行